

けんあしゆくぶつほん  
見阿闍 仏品第十二……維摩居士の前世  
ほうくようほん  
法供養品第十三……この経典の利益  
しよくるいほん  
嘱 累品第十四……経典流布の委嘱

『仏書解説大辞典』にはわかりやすく、最初の四品しほんを序分じょぶん、次の六品りくほんを正宗しょうじゅう分ぶん、次の二品にほんを証誠分しょうせいぶん、そして最後の二品にほんを流通分りゅうつうぶんというように区分してあります。

いずれにせよ、これらの題目をみただけでは、全体像は見えてきませんが、読み進んでいくうちに、この経典の面白さが、次第にわかってくるはずで、途中で投げだしたくなっても、どうぞ最後まで、くつついてきてください。

## 汚れたこの世界こそ仏の世界——ぶつこくほん 仏国品第一

### 『維摩経』の説かれる舞台

それでは第一の「仏国品」から読んでいきましょう。どんな経典でも同じですが、ここではまず、この『維摩経』が説かれる舞台背景とでもいうようなものが述べられているところです。

本書では、『維摩経』をできるだけ忠実に引用しますが、その内容は一貫して、ブツダの説かれた根本的な教えを乗り越えて、大乘仏教の立場からこれを解釈し直そうとする経典ですから、ほんとうは、ブツダの教えをまずよく理解してからでない、この経典が説こうとしていることの真意をつかむことは難しいのです。

しかし、そんなことを言っても、仏教初心者にとっては無理な話でしょう。

そういうことも配慮しながら、なるだけ大乘仏教の特色が際だって説かれるような部分を選んで、それらをわかりやすくお伝えしていこうと思います。

あるとき世尊せそん（ブツダのこと）は、ヴァイシャーリーのアームラバーリー（マングー樹）の園林の中で、八千の比丘びく（出家者）の大集団といっしょにおられました。

これらの比丘たちは、すでに悟りの智慧を開いている羅漢らかんさんたち。またそこには、二万二千という大勢の菩薩ぼさつ（修行者）たちもおられました。経典はまず、これらの比丘や菩薩たちを讃嘆することから始まります。次にそれらを要約してみましよう（本書では、同じ内容の訳が繰り返し続く場合、重要な箇所以外の訳を省略することになります）。

彼らは大神通だいじんつうの修行によって、迷いの城から抜け出て、仏に護られながら法の城を護り、特に誰かから頼まれることがなくても、あらゆる人々と友達になっています。

そして悪魔や敵対者を退け、特別の智慧と理解と弁舌によって、周りの人々を導いています。彼らはしっかりと戒律を護りながら坐禅に励み、豊かな智慧をはたらかせることによって、周りの衆生たちの能力を知ることのできる者たちばかりであります。

彼らはどんな人にも屈することのない自信に満ちています。装身具などは身に付けず、みずからの美しい相好そうごう（姿や形）で身を飾り、金剛石こんごうせき（ダイヤモンド）のような固い意志を持ち、仏法僧の三宝に対する、決して壊れることのない強い信念を持ち、美しいながらも雷鳴の轟とどろくような声で仏の教えを説き、人々が願う求めていることを知る智慧をもって、この仏のおられる世界（仏国土）を輝かしいものにしていきます。そういう彼らのことは、いくら称たたえようとしても、彼らの身に付けている量り知れない徳ですから、とても言い尽くすことなどできません。……

とまあ、こういう調子で、その讃嘆の言葉が延々と続いていきます。しかしここでは、それ以上の讃辭を書き写す必要はないでしょう。

## 維摩經ファンタジー

さて、この集まりは、世界中からやって来た、一万の梵天（インドの神々）や、帝釈天（梵天とともに仏法を守護する神）、そして一万二千のインドラ神たち、さらに三万二千の菩薩など、出家や在家の男女でいっぱいでした。

そこでブッダは獅子座に坐り、これら多くの人々に囲まれて、説法を始められました。そのお姿は豊饒として輝き、その偉容はまるで世界一高い須弥山が海の中から浮かび上がってきたようで、集まっているすべての人々を、すっぱりと覆っていました。

そこへまた、宝積という名の菩薩が、五百人の街の青年たちを連れてやって来ていました。彼らはそれぞれに、七種の宝石で飾られた大きな傘（傘蓋）を持っていて、ブッダの脚に自分らの額を着けて礼拝し、みな自分の持っている傘をブッダに捧げました。

するとそれぞれの傘は、ブッダの威力によって一つの大きな傘となり、その傘がこの三千大千世界（仏教でいう無限に広がる世界）をすっぱり包み込み、山も、海も、宮殿も、城も、街や村も、すべてがその傘の中に現われたのです。

これを見ると、集まった人々はみんな驚嘆し、歓喜し、喜悦をもって、ブッダを礼拝し、瞬きもせずにもその姿を見つめていました。……

このようにまことにファンタジックな光景から、この經典は始まります。このブッダの神通力を目の当たりにした宝積青年は、右の膝を地に着け、ブッダに向かって合掌し、讃仰の詩を唄います。そして最後に、

世尊よ、ここに連れてきた五百人の若者たちはみな、無上の完全な智慧に到達することを願っています。彼らはみな、ブッダの国土を浄めたいと願っているのです。どうかこれらの菩薩たちに、仏国土を浄くするとはいつたいどういうことかについて、説いていただきたいのです。

と願います。これに対してブッダが、「仏国土」つまり理想的な仏の国というものはどういふものかについて、切々と説かれるのが、この「仏国品第一」の内容なのです。

## 菩薩の世界

ここでは、大乘仏教が理想とする世界のありようが、ブツダによって詳しく説かれていきます。次にその内容を、いくつか読んでみましょう。

お前たちよ、衆生しゅじょうという国土こそ、実は菩薩の国土なのだ。なぜかという、菩薩は衆生が受ける利益が多ければ多いほど、それを仏国土と受け取るからである。菩薩にとって仏国土は、衆生の利益なしにはあり得ないのだ。そしてその国土を空中に造ろうとしても、それは不可能であろう。

しかし、ただ真つ直ぐな心、深い決意、修行、発心ほっしんというものさえあれば、それこそがそのまま仏国土なのだ。布施ふせ（人に与える）、持戒じかい（戒律を守る）、忍辱にんじやく（耐え忍ぶ）、精進しやうじん（修行に励む）、禪定ぜんじやう（坐禅する）、智慧ちゐ（悟りの智慧）があれば、それがそのまま仏国土なのだ。

と、ブツダは六つの基本的な行為（六波羅蜜ろくぱらみつ）さえ実践すれば、そのままこの地上が、理想郷としての浄らかな仏国土なのだと言われます。因みに六波羅蜜

とは、悟りの彼岸に到るための六つの条件です。

結論的に言えば、この世界の清浄を得たいと欲する菩薩は、自己の心を修め浄めることに努めるべきであり、菩薩の心さえ浄らかであれば、この穢れた世界がそのまま清浄な仏国土なのだ、と言われたのです。それを聴くと仏弟子の一人である舍利弗しゃりほつの心に、次のような疑問が生じました。

もしブツダのおっしゃるように、心さえ清浄であればこの世界は浄らかになるといふのならば、すでにそういう菩薩行を行じられた心の淨いブツダがおられるこの世界（仏国土）が、どうしてこんなに汚れたものなのだろうか、と。

するとブツダは、舍利弗の心に起こったこの疑問を、神通力によって即座に見抜かれ、次のように言われたのです。

舍利弗よ、太陽や月というものは不浄なものであると思うか。そんなこ

とは決してないであろう。しかし、残念ながら凡人にはそれが見えないのだ。その見えない理由というのは、お前たちが眼を瞑つむっているからなのだ。責任はお前たち衆生の側にあつて、太陽や月にはないであろう。

舍利弗よ、世界はもともと素晴らしく、清らかなものであるのに、お前には、それが見えないだけじゃないか。

### 仏国土の清浄

すると傍らにいた梵天の神である螺髻梵王らきつぽんのうがこれを聴いていて、舍利弗に言ったのです。

舍利弗さん、仏国土が清浄でないなどおっしゃってはいけませんよ。

ブツダの住んでおられるこの世界は、迷いの三界でありながら、すでに金銀で飾られた宮殿（他化自在天たけじざいてんの住む宮殿）なのですから。

しかし舍利弗は、また言葉を返して言います。

梵天よ、あなたがそう言われても私には、この世界の大地に高い低いがあり、棘いばらや崖いぼちつぶち、あるいは山頂があるかと思えばまた、低い溝には泥がいつばいなのが見えるだけじゃないですか。

そこで螺髻梵王らきつぽんのうが言います。

そのようにこの世界が不浄に見えるのは、あなたの心に高い低いがあるからです。そもそもブツダの智慧を得たいという意欲そのものが、始めから清らかでなく、汚れているからじゃないですか。舍利弗さん、悩み苦しみながら、この世の衆生を思う心が平等で、ブツダのような智慧を得たいという意欲さえ浄らかであれば、この仏国土は、清浄そのものとして映るはずですよ。

ブツダは、そこに集まっている人々がみな、梵天の言うことをまだ疑っていると察知され、この世界（三千大千世界）の上に、自分の足の指を置かれました。

するとそのとたん、この世界が無量の宝石で美しく飾られた世界として現われたのです。これが『維摩経』の説く、独得のファンタジーなのです。そして続きます。

その浮かび上がった世界は、あたかも無限の功德くどくの宝で飾られた世界の出現で、人々は自分たちもみな、一人ひとり宝の蓮華で飾られた座に坐っているのを感じたのです。

ブツダは舍利弗に向かって、「これが本当の仏国土なのだが、修行を完成した人（如来）は、衆生を次第に成熟させていくために、仏国土には欠陥や不完全があるように見せかけているだけなのだ」と言われました。

これを聴くと集まっていた八万四千の人々は、それぞれ自分たちもそのような「この上なき素晴らしい悟り（無上むじょう正等正覚しょうじょうがく）」を得たいものだという、崇高な悟りを求める心（菩提心ぼだいしん）を起こしたのです。

ブツダが再び足を組まれると、世界はまた元の状態に戻りました。これを見ると三万二千の天人たちは、いかにもこの世界は無常なものであるということ

を知り、みな法に対して、穢れない清浄な眼（法眼）を持つ者となったのでした。

ここで示されていることは、仏国土という理想世界はこの穢れた現実世界以外にはない、ということなのです。